



チームを率いて19年目の内藤秀和監督

今から9年前の2009年。新島学園は選手権予選で快進撃を続け、決勝まで駒を進めた。

1966年には全国大会で3位に輝き、これまで選手権出場2回と、「古豪」として知られる新島学園の復活の時が来たかと思われたが、前橋育英に0-1の大敗。

以降、県大会の上位には顔を出すが、ファインリストになったのは2011年度の新人戦のみ（桐生第一に延長戦の末に2-1の敗退）。2016年度の選手権予選で準決勝に進んだが、前橋商に0-1で敗れた。「あの0-1は本当に悔しかったし、脳裏に刻まれた。でも、しっかりとまとまって戦えば、決勝まで行けることを示してくれた年でもありました」

今年5月に完成した綺麗な人工芝のピッチで練習をする選手たちを観ながら、内藤秀和監督はあの歴史的な大敗を振り返った。

今年で就任19年目を迎える内藤監督は群馬県出身ではない。愛知県で生まれ育ち、筑波大に進学すると、筑波大学大学院を経て、青山学院大学サッカー部のコーチをし

ていた。そこで「新島学園をもう一度強くして欲しい」というオファーをもらい、群馬にやって来た。

「縁もゆかりもないところだったので驚きましたが、元日本代表GK小島伸幸さんの母校で、昔は全国3位に入ったこともあるチームだということで、古豪復活を懸けて引き受けました」

当時、初戦で負けてしまうようなチームで、かなり弱体化が進んでいた。そこからコツコツと指導を積み重ねた結果、冒頭で触れたように県内では上位に食い込むようになった。

筑波大時代は1学年上に木山隆之（元・愛媛FC、モンテディオ山形監督）、服部浩紀（元・ザスパクサツ群馬監督）、同年代に大槻毅（現・浦和レッズヘッドコーチ）、大岩剛（現・鹿島アントラーズ監督）がおり、3つ下には佐藤一樹（現・FC東京U-18監督）がいる。

「本心に刺激になりますね。先輩後輩がプロやJの下部組織を率いて、同級生がビッグクラブで指揮を執っている訳です

ら。僕ももっと指導者として勉強をして行きたいと思っています」

信念変わりなく率いているチームは、部員が全学年を合わせて40人程度と少ないが、文武両道の旗の下に、「古豪復活」を胸にトレーニングを積んでいる。

「前橋育英との決勝戦を小4だった僕はテレビで観ていました。父親が新島出身だったのもあって、応援していたら……。負けた後は「僕が新島に入って、この雪辱を果たすんだ」と思ってここに来ました」FW宇津木春人がこう語ったように、あの敗北は次なる息吹を生み出していた。宇津木は新島学園中に進学すると、中3の時に全国中学サッカー大会に出場を果たした。チームは初戦で兵庫の川西市立東谷中に1-1からのPK戦の末に敗退。このときのメンバーの多くが高校に進み、高校での全国大会出場を目標に据えた。

「全国が決まってからちよつとチームが緩くなってしまい、まとまりきれないまま全国に入ってしまった」

こう語るのは新島中のキャプテンで、現



キャプテンの永井颯泰（左）と近藤零志

在高校のキャプテンでもあるMF永井颯泰だ。新チームの主軸で全国を経験したメンバーは、永井、宇津木の他にGK瀬間陸斗、MF古島稔樹の4人。彼らは2年生からのレギュラーであるが、チームは今年の県リーグ1部で苦戦を強いられ、来季の2部降格の憂き目に合ってしまった。

「新チームはもともとと本気にならないと常に厳しい戦いを強いられてしまうと思います。インターハイ、選手権予選を勝ち抜くためには、日常から1部のチーム以上のモチベーションと集中力を持ってサッカーに取り組まないとはいけません」

永井が力強くこう語ったように、全国を経験した彼らが軸となり、かなり厳しい船出となるが、その逆境をはね除けんと静かに闘志を燃やしている。

「群馬はこだわりの持つて勉強している指導者が多いので、その中で勝つことも難しさを感じています。でも、だからこそやり甲斐がある」（内藤監督）

「古豪復活」へ。9年前の大敗を胸に、彼らはゆっくりと「茨の道」を歩き始めた。